倫風宏話

平和祈念朝起会を成功させよう

上廣榮治

もうすぐ七十回目の広島、長崎の原爆の日がやって来ます。七十年前のあの日、先師は広島で被爆し、その灰燼の中から我が会が誕生したことは、皆さんご存じのとおりです。この季節になると、いつも思い出す人がいます。日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士です。

湯川博士がノーベル物理学賞を受賞したのは敗戦からわずか四年後、一九四九（昭和二十四）年のことです。それは占領下で自信を失っていた日本人に勇気と希望を与えてくれたビッグニュースでした。まだ少年だった私にとっても「赤バット」の川上哲治、水泳の古橋廣之進とともに湯川秀樹はヒーローでした。

湯川博士は、夜、床の中でひらめいたことをすぐにメモできるように、枕元に紙と鉛筆を置いて寝たといいます。寝ているときも学問を忘れず、文字通り「気付き即行」ができるように用意万端整えていたのです。ノーベル賞を受けた中間子理論の着想を得たのも、この夜中のメモがきっかけだったといいます。

湯川博士の人となりをよくあらわしているエピソードがあります。哲学者の鶴見俊輔さんが書かれた中学生向けの本に紹介されている、ある日の博士の授業風景です。

――黒板に数式を書いていて、何度もその黒板を見るんだ。そして、「ちょっと待ってくれ」といって、教室をでて行ってしまった。それで、数学の先生を連れてきて、「先生、どうもこれ、変なように思うんだけど、まちがっている？」といったっていうんだね。もちろん生徒の前ですよ。それで、それを見ていた数学の先生は、「ああ、これ、ここがまちがっている」、そういって少しなおした。湯川さんは、そこから、ふたたび講義をつづけたっていうんだ。――（『大人になるって何？』晶文社）

もしも、自分が間違っているかもしれないと思ったら、すぐに人に尋ねて教えをこう。それだけ学問に対して真摯であり、真摯であるがゆえに「気付き即行」ができたのです。

湯川博士はノーベル賞受賞の前年、アメリカのプリンストン高等研究所に招かれ、その後の人生に大きな影響を与えることになる経験をします。彼が研究室に着くとすぐ、一人の老人が訪ねてきました。アインシュタインでした。この世界的な大科学者は湯川博士の両手を握って泣きだしました。そして、「原爆で何の罪もない人々を大勢死なせてしまいました。許してください」と繰り返すのでした。

その姿に衝撃を受けた湯川博士は、学問は社会と無縁ではいられない。学問は平和とともになければならないと深く心に刻んだのでした。このときから、それまで学問一筋だった博士が「共生の理想」を目指して、世界の平和と核兵器の廃絶を訴え続けることになったのです。そして、その姿勢は生涯変わることがありませんでした。

一九五四年、三月一日、アメリカは太平洋のマーシャル諸島のビキニ環礁で水爆実験を行い、日本のマグロ漁船第五福竜丸の乗組員が被曝しました。当時の新聞に、湯川博士はおよそ次のようなことを書いています。

――原子力問題の主な責任はいうまでもなく核保有国にある。しかしそれは人類全体の問題でもある。

……原子力の脅威から人類を守ることは、他の何ものよりも優先されなければならない。……私は科学者であるがゆえに、原子力対人間という問題をより真剣に考えるべき責任を感じている。私は日本人であるがゆえに、この問題をより身近に感ぜざるをえない。――

「日本人であるがゆえに」とは、いうまでもなく、広島と長崎に原子爆弾を落とされた日本人であるがゆえに、ということです。

一九五五年、イギリスの哲学者ラッセルとアインシュタインがすべての核兵器を廃絶することを訴えた宣言を発表しました。その宣言に署名した十一人の中に湯川博士も名を連ね、後に科学者を中心とした「パグウォッシュ会議」（のちにノーベル平和賞を受賞）にも参加します。同じ年、国内では、湯川博士など文化人を中心に「世界平和アピール七人委員会」が結成されました。

ラッセル＝アインシュタイン宣言の翌年、湯川博士は原子力委員会の委員に任命されます。委員は五人で、初代委員長の正力松太郎さんはこの年に、科学技術庁の初代長官に就任します。原子力委員会は日本の原子力政策のあり方について話し合う会議で、正力委員長は、米国の技術を輸入して五年間で原子力発電を実現するという構想を発表しました。湯川博士はこの構想の性急さを疑問視し、自国の基礎研究を抜きにした輸入技術への過度の依存に懸念を表明して、翌年には委員を辞任しました。もしもこのとき、湯川博士の提言を入れていたら……、と考えてしまうのは私だけでしょうか。

湯川博士は文学にも造詣がありました。広島の平和記念公園に行くと、戦争の悲惨さ、原子爆弾の残忍さを実感させる原爆ドームや資料館のほか、園内には数多くの慰霊碑や記念碑が建っています。その中に「平和の像・若葉」があります。小鹿を連れて、今にも駆けだそうとする少女のブロンズ像で、小鹿が少女を見上げ、少女は左手を小鹿に差し伸べています。制作者は文化勲章を受章した彫刻家、圓鍔勝三さん。台座には同じく文化勲章受章者である湯川博士の短歌が刻まれています。

――まがつびよ　ふたたびここに　くるなかれ　平和をいのる　人のみぞここは　　湯川秀樹――

「まがつび」とは災厄をもたらす神である「禍つ日の神」の略称です。『古事記』に黄泉の国の穢れから生まれた神として登場します。この悪神に強く訴えるかたちで戦争と原爆を拒む力強い短歌です。

晩年の湯川博士は、ガンを患いながらも、核廃絶の平和運動を続けました。人に支えられて車椅子から立ち上がり、集会や会議の場で発言しました。博士の当時の日記帳の最初のページには、走り書きで「一日生きることは、一歩進むことでありたい」と記されています。博士は、人々が平和に暮らせる共生社会を見すえて、一日一日、人生を歩んだのでしょう。

一九〇七（明治四十）年生まれの湯川博士は、一九八一（昭和五十六）年、七十四歳の生涯を終えました。博士の死から三十年が過ぎた年の三月十一日、福島原発で世界史上最大級の原発事故が勃発し、今日なお、状況は楽観を許しません。事故の原因として、外来の設備や技術に頼り、地震列島といわれるわが国にふさわしい独自の設備や技術の開発に抜かりがあったのではないかという指摘もあります。私たちは、今も湯川秀樹博士に学ぶことが少なくありません。

湯川博士が願った平和と核兵器の廃絶は、人類すべての願いです。戦争を厭わぬ人はなく、平和を願わぬ人はおりません。とすれば、「平和祈念朝起会」もまた、すべての人の共感を得られるはずです。「共生の理想」を柱に据えて、できるだけ多くの人と「平和祈念」の想いを共有し、朝起会に参集して、倫理の普及につなげていっていただきたいと願っております。